

2019年6月24日

「金融ジェロントロジーの展望」

慶應義塾大学経済学部教授

ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター長

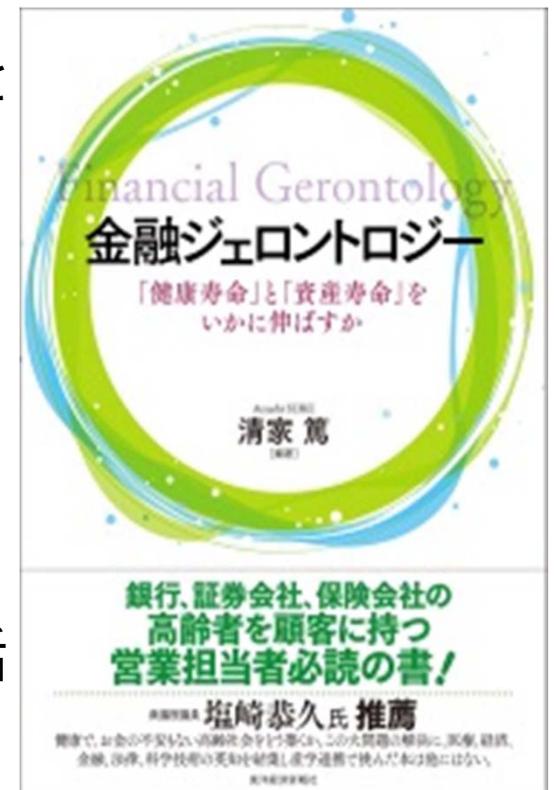
日本金融ジェロントロジー協会学術顧問

駒村康平

注：本資料の引用、転載はご遠慮ください。₁

1. 金融ジェロントロジーについて

- 1：老年学、医学、脳神経科学の蓄積を経済、法律に応用する。
- 2：「合理的な人間像」を修正し、必要な制度・政策を提案する。
- 個人と政府、社会のあり方
- 3：高齢者の心的特性を踏まえた顧客本位のサービス
- 「丁寧、わかりやすさ」を超えた高齢者の心理的な部分を理解したサービス（研修）と商品の開発
- 4：長期的・包括的に顧客の利益を最重視する倫理観
- 5：金融と福祉（介護）の連携（金・福連携（地域包括ケアシステムへの金融・消費サポートサービスの参入）



学際領域としての金融ジェロントロジー

- 老年学、認知科学、脳・神経科学の進歩・成果を社会科学が取り入れ、政策現実に活用する
- 自然科学的アプローチ：fMRI（機能的磁気共鳴装置）、経済的な意思決定における脳の構造、動き、血流を直接観察→「神経経済学」
- 心理学を組み入れた「行動経済学」の発展
↳ 「行動経済学」と「神経経済学」の結合→認知機能の変化が経済行動にどのような影響を与えるか
(「加齢行動経済学」に基づく、応用分野としての金融ジェロントロジー（金融老年学）)

高齢化のインパクト

- 「認知機能」とは：外部から情報を取り入れ、分析し意思決定を行い、行動に動かす機能のこと
- これまで想定：認知機能が十全で、合理的な意思決定ができる人から構成される市場。判断力を失った人は成年後見で対応する
- これから想定：認知機能が落ちているかどうか、本人もわからないし（認知症発症の2.6年前から自分の記憶障害を認識しなくなる、アルツハイマー病認知症では、自らの記憶力を家族の評価より高く見積もっている（成木（2019）「金融庁市場ワーキング資料2019年2月19日」）、他人も見分けにくい人が増加する。
- 高齢化社会：認知機能が十全ではないが、まだ成年後見の対象でもない人が増加する
- 長寿人生：自分の認知機能が十全でない状態を一定期間、経験する人が増加する
（* 認知症でなくとも、認知機能の低下は誰でも起きうること）

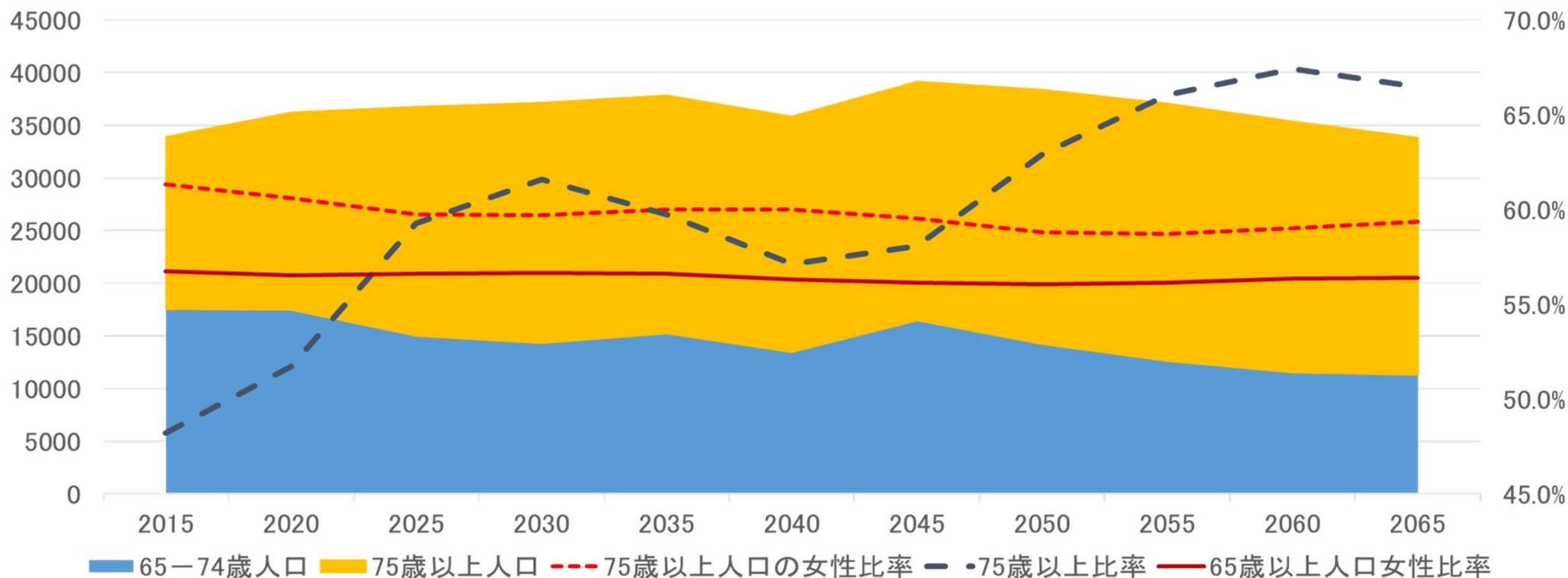
→「**市場のあり方（契約法、市場ルール）**」を見直し：「**契約の手続きさえ適法であれば問題ないのか？**」

（高齢化社会における高齢投資家に対する倫理的な責任） → **高齢者の心身の状態を理解した上での取引契約（高齢者の心身と経済行動を理解する「金融ジェロントロジー研修」）**

今後の高齢者数の見通し：75歳人口の動向

65歳以上人口の構成と「65歳以上人口に占める75歳以上人口」の比率（%）

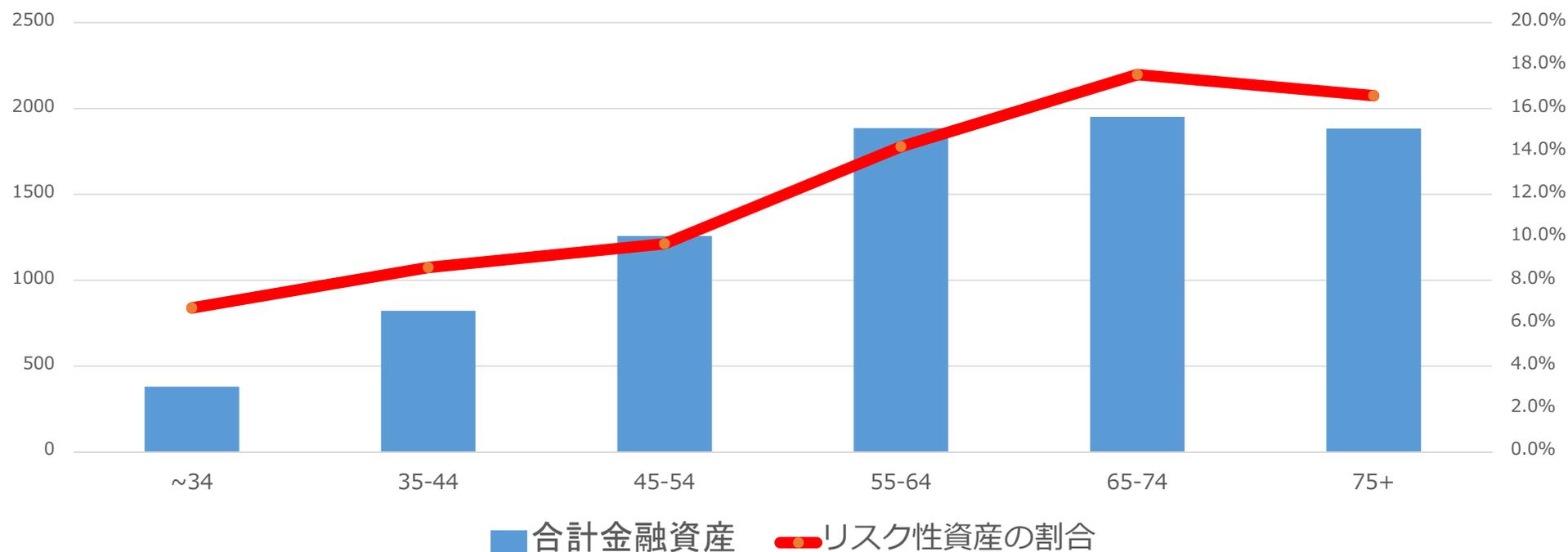
65歳、75歳以上人口（人数（単位1000人）、75歳以上比率（%）、女性比率（%））の推計



国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2017年）より作成

加齢とともに増加する金融資産額とリスク性資産の割合

加齢と金融資産合計額（万円：左）、リスク性資産（株式・債券、信託等）割合（%：右）



出所：総務省『平成21年全国消費実態調査』個票データより筆者作成

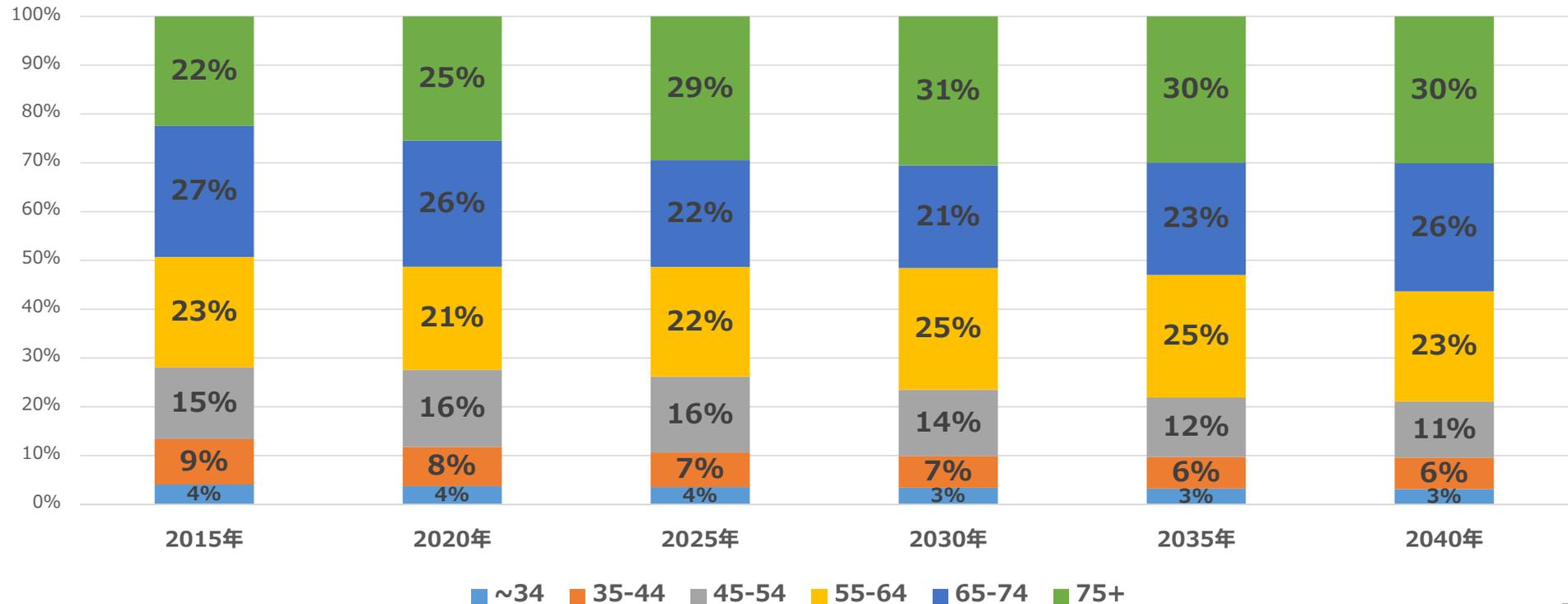
注：総務省統計局『全国消費実態調査』の調査票情報を筆者が独自集計したものである。そのため全国消費実態調査の本体集計との整合性があるとは限らない。また特に標本数の少ない集計区分では標本誤差に留意が必要である。今回、調査票情報の利用を許可いただいた総務省統計局関係各位に心より感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費26380372の助成を受けたものである

「金融資産」の高齢化

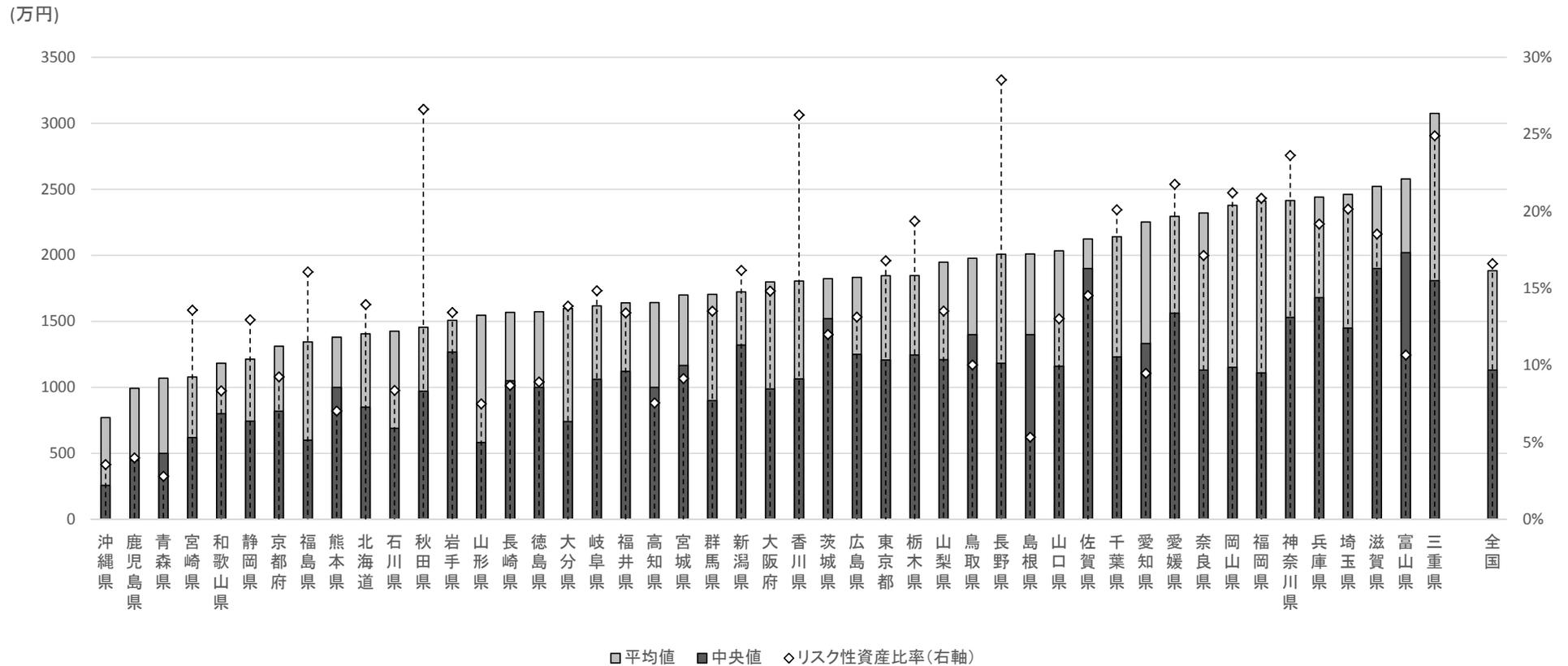
54歳未満率：29%（2014）→28%（2020）→26%（2025）
→24%（2030）→21%（2035）→20%（2040）

金融資産の高齢化（年齢別金融資産の保有割合の推計）

日本の世帯数の将来推計(全国推計)』（2018年推計）より作成



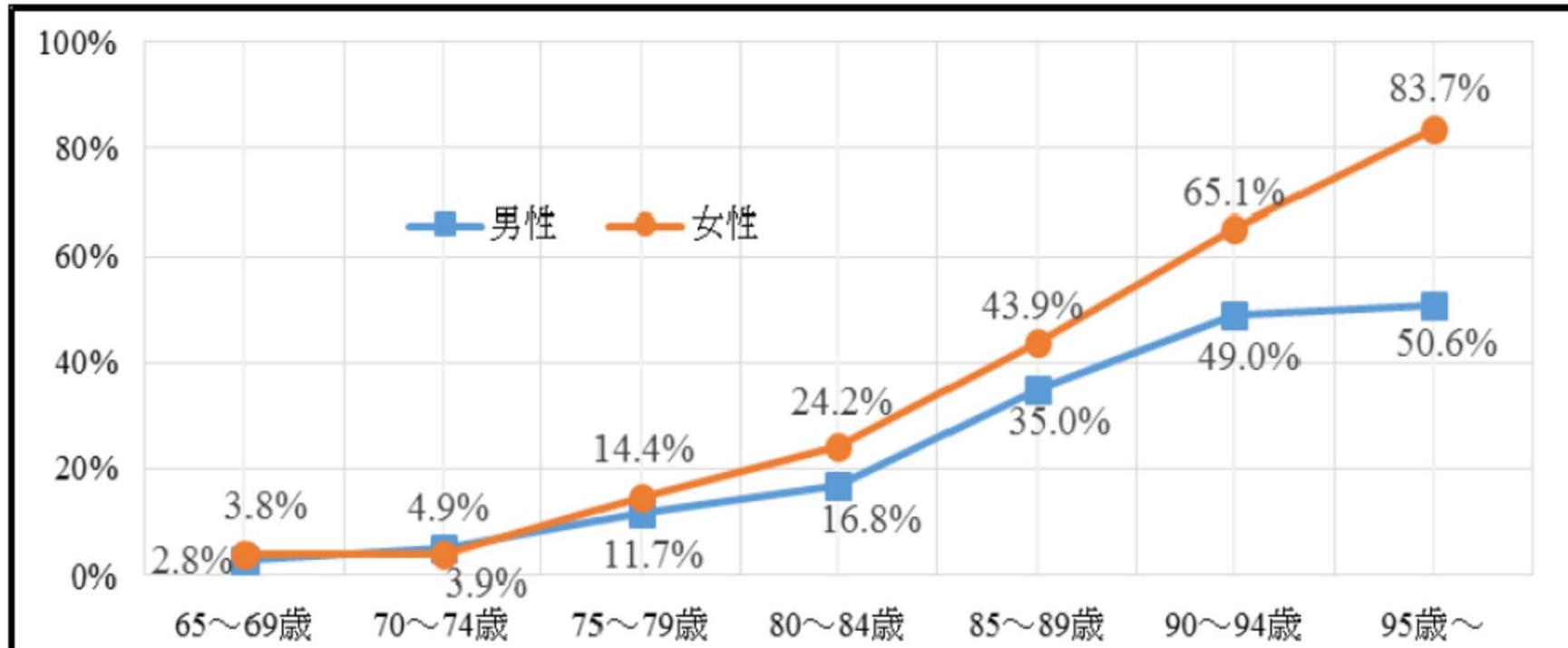
都道府県別75歳以上 金融資産残高（平均、中位）、リスク性資産比率



出典：駒村康平・渡辺久里子（2018）

「75歳以上高齢者の金融資産残高と資産選択について－資産の高齢化への対応」『月刊統計2018年8月号』

認知症有病率（年齢別、性別）

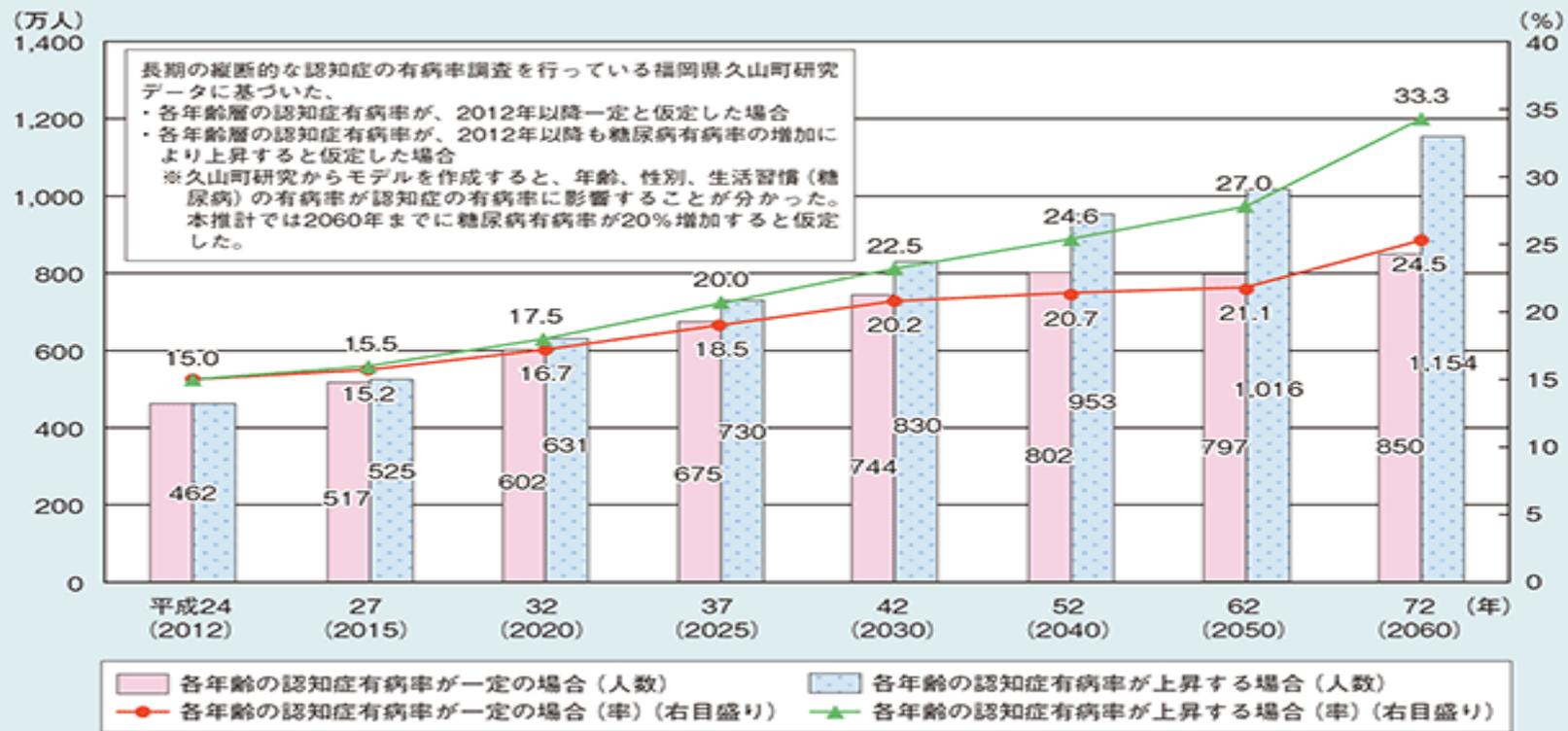


(出典) 朝田隆ほか『都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応 平成23年度～平成24年度総合研究報告書』(厚生労働科学研究費補助金認知症対策総合研究事業) 2013.3, p.72. <http://www.tsukuba-psychiatry.com/?page_id=806> を基に筆者作成。

出典：佐藤通生（2015）「認知症対策の現状と課題」『調査と情報 No846』

65歳以上の認知症患者は800－1,200万人へ(2060年)

図1-2-3-2 65歳以上の認知症患者の推定者と推定有病率



資料：「日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究」(平成26年度厚生労働科学研究費補助金特別研究事業 九州大学二宮教授より内閣府作成)

出典：内閣府(2017)『平成29年高齢社会白書』¹⁰

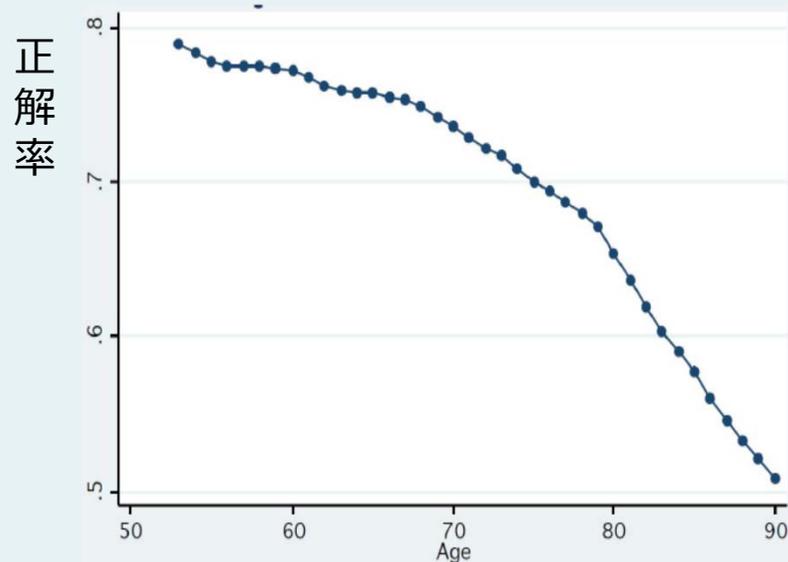
加齢の影響：簡単な計算問題への回答率が低下する

左：「病気になる確率は10%です。1,000人のなかで病気になる人は何人でしょう」

右：「賞金合計200万ドルで当選者が5人いたら一人いくらですか」

“If the chance of getting a disease is 10 percent, how many people out of 1,000 would be expected to get the disease?”

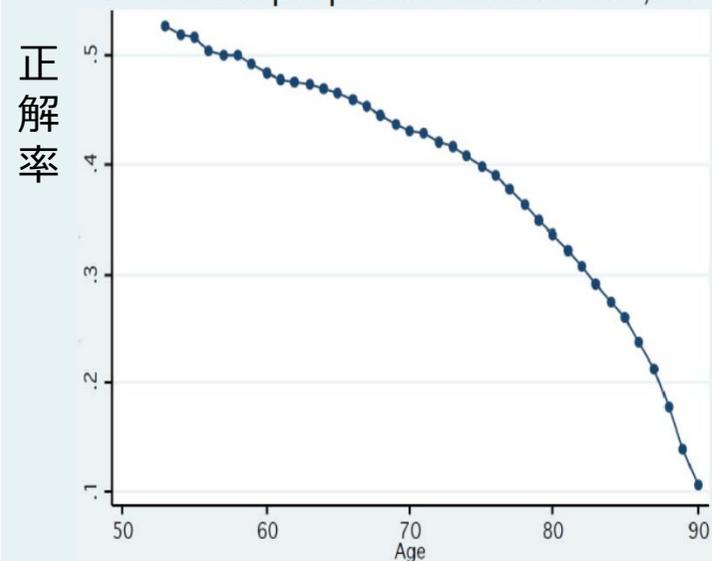
Fraction of people who answer “100”



Source: HRS; Agarwal, Driscoll, Gabaix, Laibson (2009)

“If 5 people all have the winning numbers in the lottery and the prize is two million dollars, how much will each of them get?”

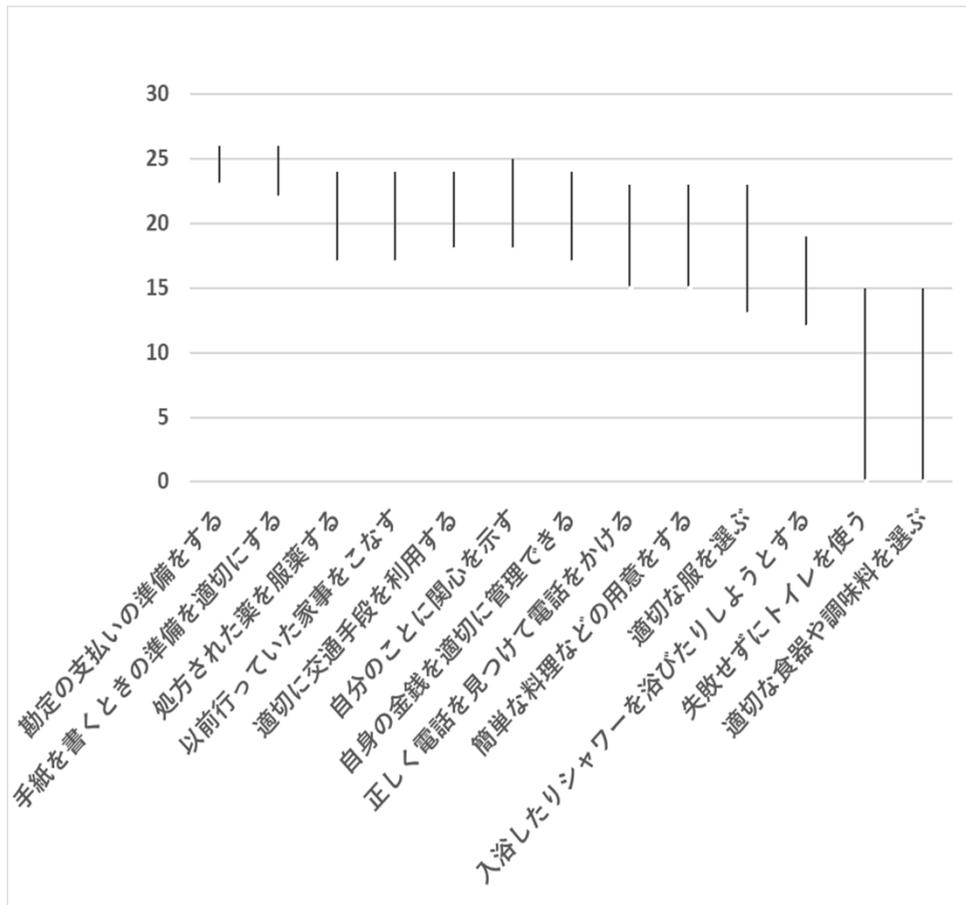
Fraction of people who answer “400,000”



Source: HRS; Agarwal, Driscoll, Gabaix, Laibson (2009)

Sumit, A., John, C. D., Xavier, G., & David, L. (2009). The Age of Reason: Financial Decisions over the Life Cycle and Implications for Regulation. *Brookings Papers on Economic Activity*, 2009(2), 51-117.

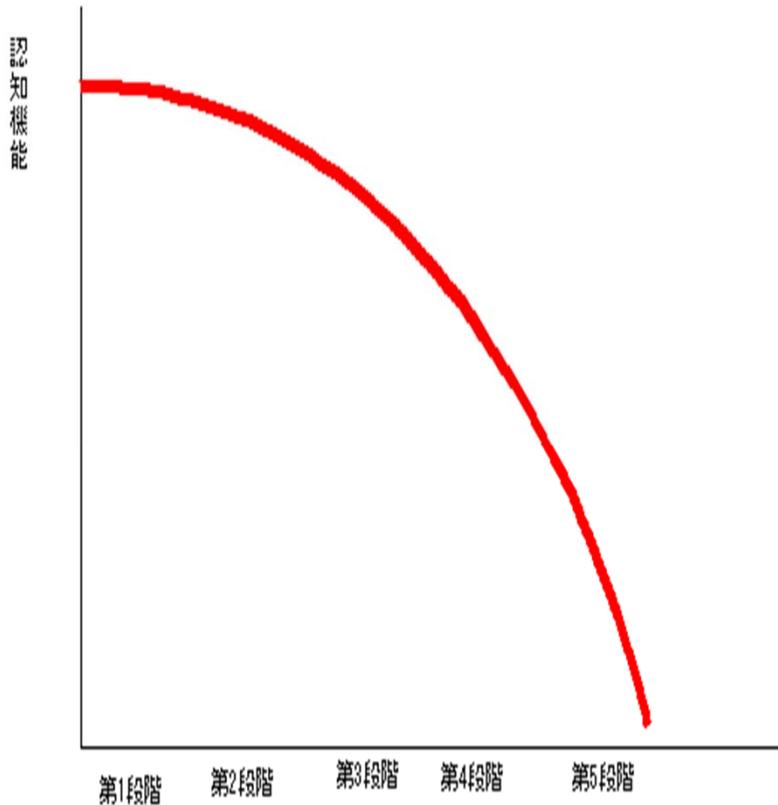
加齢と資産管理・運用の関係 初期段階で金融取引が困難になる（DAD項目のMMSEスコア（25、50、75%））



DAD item	75 th	Median	25 th
勘定の支払いの準備をする	26	24	23
手紙を書くときの準備を適切にする	26	24	22
処方された薬を服薬する	24	23	17
以前行っていた家事をこなす	24	23	17
適切に交通手段を利用する	24	23	18
自分のことに関心を示す	25	23	18
自身の金銭を適切に管理できる	24	22	17
正しく電話を見つけて電話をかける	23	18	15
簡単な料理などの用意をする	23	18	15
適切な服を選ぶ	23	16	13
入浴したりシャワーを浴びたりしようとする	19	15	12
失敗せずにトイレを使う	15	9	0
適切な食器や調味料を選ぶ	15	0	0

Arrighi, H. M., Gélinas, I., McLaughlin, T. P., Buchanan, J., & Gauthier, S. (2013). Longitudinal changes in functional disability in Alzheimer's disease patients. *International Psychogeriatrics*, 25(6), 929-937.

認知機能の低下とともに低下する金融に関する認知機能



第1段階	通常加齢	最小限の低下
第2段階	軽度MCI	銀行取引明細書の管理、請求書の支払い、複雑な処理能力能力が低下。適切な金融管理や経済虐待の被害など。
第3段階	軽度アルツハイマー病 (MILD AD)	お金を数えるといった簡単なものから、複雑な処理を要するほぼすべての金融能力を喪失。
第4段階	中程度アルツハイマー (Moderate AD)	自力で金融取引を行うことは困難
第5段階	アルツハイマー	完全に金融能力は喪失する

出所: Widera et al.(2011) を参考に筆者作成

資産の高齢化と金融ジェロントロジーの役割

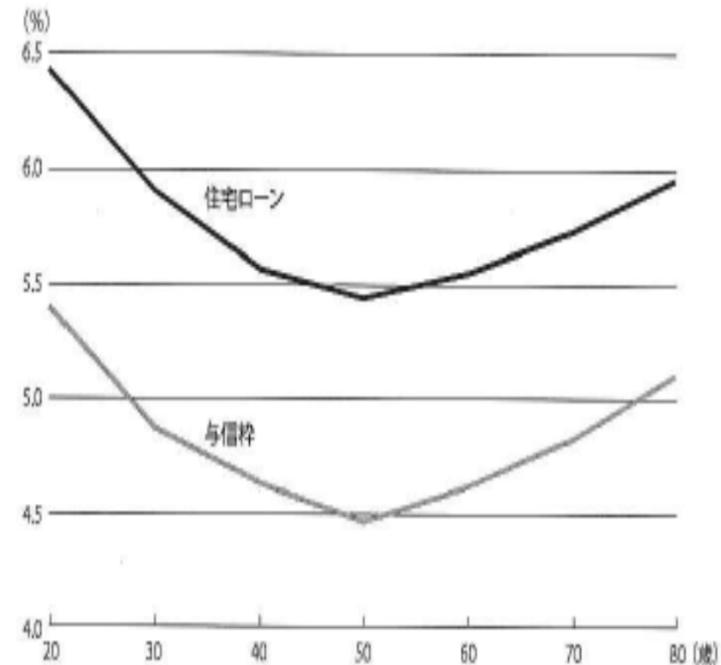
- 個人金融資産約1,900兆円の7割近くを高齢者が保有する。
- 高齢化の進展とともに高齢者の保有する個人金融資産の割合は一層上昇する。
→ 「資産の高齢化」と投資の不活性化
- 地域別に見ると資産の高齢化に大きな違いが出てくる。（大都市近郊で顕著）

年齢と金融資産の管理能力の関係

- ・ 認知機能とリテラシー、経験のバランスによって影響を受ける
- ・ 2000年～2002年にかけて、金融機関から14,800程度の個票データを分析し、年齢によって住宅ローン等の際に設定される実質金利（APR=Annual Percentage Rate）がどのように変化するかを分析。
- ・ APRは、クレジットヒストリー（クレジットカードの限度額使用率、支払い履歴、破産などのネガティブ情報）のスコアが低い場合、金利が高く設定される。
- ・ 金融資産の管理能力は、50代前半でピークになる。

Agarwal S, Driscoll J, Gabaix X, Laibson D (2009) The age of reason: Financial decisions over the life-cycle and implications for regulation. *Brookings Papers on Economic Activity* 2009: 51-117.

図表1-9 年齢と実質金利（APR）の変化



(出所) Agarwal, S. et al. "The Age of Reason: Financial Decisions over the Life Cycle and Implications for regulation," *Brookings Papers on Economic Activity*, Fall 2009.

加齢行動経済学（仮説1）

加齢に伴う認知機能低下が資産選択に与える影響を考える

1. 加齢に伴う認知機能の低下により、高齢者は「少なくなった認知機能」をより節約して判断をするため

→「**フレーミング効果**（表現の仕方によって決定が左右される）」をより起こしやすくなる

→これまでの「**経験**」に依存した判断をする

2. 加齢とともに、多くの選択肢への対応が難しくなり、わかりやすい情報とシンプルな選択肢を好むようになる

→高齢者は若年者より**選択肢が少ない方**（半分程度）を好む

3. 高齢者は意思決定を延期する傾向が強く、また選択しなかったことへの後悔を感じない

→「**保有効果**」（いったん保有したものを手放したくない）はより強くなる

加齢行動経済学（仮説2）

4. 高齢者は、肯定的な感情的出来事や情報を記憶し、ネガティブな情報を忘れるあるいは注目しない傾向がある

→ネガティブフレームよりもポジティブフレームの影響を強く受ける

→家族内（親子間）での意思決定、情報共有の課題（介護、相続問題）に課題

5. 加齢とともに、客観能力以上に自信過剰になる。

6. 時間軸については、将来を展望するという視点ではなく、過去を振り返るといった視点に立つ

→意思決定のタイミングの遅れ（資産・事業継承、資産管理、空き家問題）

7. 「わかりやすい説明、大きな文字、親切、丁寧」を超えた、高齢者の心身を理解した対応や商品設計の工夫（金融ジェロントロジー）

加齢と資産管理・運用の関係

- 認知症まで至らなくても認知機能の低下は加齢とともに進む。
（正常加齢）による行動変化
- 年齢とともに低下する「論理的、推論的」な認知機能
- 年齢とともに経験に依存する傾向が強まる。
- 年齢と金融資産運用・管理の関係
 - ↳ ハーバード大学デイビット・ライブソン：認知能力と資産運用のパフォーマンスの関係→50歳代が経済的判断の「スイートスポット」
- 70歳代：認知能力の低下と資産の蓄積→認知機能の変化とともに個人金融資産の活用が停滞する。
- 金融ジェロントロジーの貢献→**金融ジェロントロジー研修**

2. 金融ジェロントロジーとサービス、商品開発

金融ジェロントロジーの役割

